中学校
の事例

エンパワメント視点を大切にした支援

～ SSWは学校と関係機関をつなげる調整役です～

― 中学校のSSWにお聞きしました ―

― 関わった世帯の状況

Bさん：中学２年生の女子。１年生の時は遅刻や欠席があるものの登校できていたが、２年生の５月ごろから不登校に。母の感情の受け止め役を担ったり、弟たちの世話や送迎をしている。これまでがんばってくれていた母を助けるために家事をしたい、その役割を取上げないでほしいと思っている。

家　族：母と弟二人（小学４年生・保育園の年長児）。母は自立心が強く、また社交的な方だったが、最近はしんどそうな表情。

― 支援のきっかけは？

Bさんが中学２年生の６月ごろに担任から『Bさんが不登校気味だが家庭訪問しても会えず、保護者とも連絡がつかない。今年度からBさんの担任となったが、本人や保護者との関係性がまだできておらず、何か事情があったとしても、それすらわからない状況で心配している』と相談がありました。

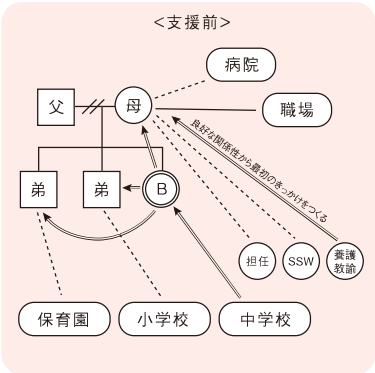
そこで、７月に中学校でケース会議を開きました。小学生の弟もいたことから、夏休みに「小中連携ケース会議」も開催し、情報共有を図りました。要対協事務局に確認すると、弟が保育園に通っていないことがわかり、Bさんが弟の世話をしているヤングケアラーかもしれない、ということで支援の検討を始めました。

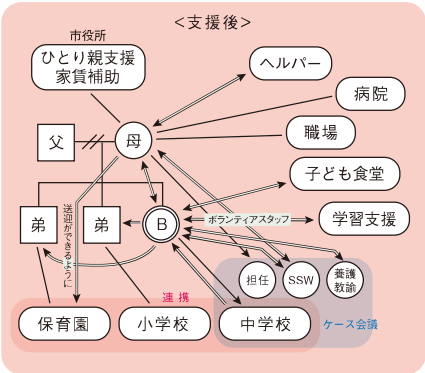
― どのような支援をされたのでしょうか？

まずは、支援方針をみなで共有したかったので、ケース会議を開催しアセスメントとプランニングをしました。ケース会議は「校内ケース会議」「小中連携ケース会議」をはじめ、学校以外の関係者が集まる「多機関ケース会議」「当事者が入ったケース会議」などがあり、様々な関係機関が集まりBさん世帯の支援について検討しました。

Bさんや母との関係を築くために保護者面談や子ども面談を実施しました。母は自立心の強い方だったので、当初は困りごとをストレートに話していただけませんでしたが、Bさんが登校できていないことは心配、とのことだったので、そのことを一緒に考えましょうとお伝えしました。その後、家庭訪問を続ける過程で母の困りごとを話していただけるようになり、行政の家賃補助制度や学習支援事業、地域の子ども食堂等につないでいきました。必要に応じて、同行支援も行いました。また、Bさんは中学２年生だったので、高校進学に向けた準備に取り組みました。支援が入ることによって、母が弟の送迎をできるようになり、Bさんの負担が軽くなりました。

▼ 支援前後をジェノグラムとエコマップで記載したもの





― 工夫されたことはありますか？

- **ケース会議**
  支援の方向性を決めるための大切な会議ですが、学校の先生方はお忙しいので、決められた時間内で話が深められるように資料や進行の工夫をしています。ケース会議は、学校と関係機関がつながる場でもあり、私はその調整役を担っています。
- **つながりを大切に**
  このようなケースの場合、つながりのある方からアプローチするようにしています。今回の事例では、母とつながりのあった養護教諭に同席してもらい、私も少しずつ関係を築き、支援の押し付けではなく、母の思いを尊重した支援をするようにしました。
- **役割分担**
  関係者全員が重たい話をするとBさんや母がしんどいだろうと考え、本人の不安を聞く人、高校進学などの明るい話をする人などの役割分担を行い、重たい話はご世帯の事情を理解しているSSWが引き受けることにしました。
- **つなぐための工夫**
  今回のケースに限らず、例えば、役所での手続きに不安を感じておられたら同行することもありますし、事前に役所に電話を入れておいて手続きがスムーズに進むようにすることもあります。
  当事者の方の状況に応じた支援を心がけています。

― 支援によって、どのような変化がありましたか？

住宅の家賃補助が受けられたので、母の金銭的な心配事が軽減されました。それに加え医療にもつながったことで、母の体調が改善しました。また、もともとBさんは家族のためにケアをがんばっていたので、『自分の役割を取上げないでほしい』と思っていたのですが、母の体調が改善し弟の送迎ができるようになって、Bさんも安心できたのか、登校できるようになりました。

また、進学希望があったため、学習支援を行っている居場所につないだのですが、高校に進学した今では、そこでスタッフとして活躍しています。

― 大切にされていることを教えてください

エンパワメントの視点を大切にしています。支援者側が当事者の本来持っている力を奪ってしまうような支援をしてはいけないと思っています。どなたにも『なんとかしたい』『がんばりたい』という気持ちがあるものです。その自分の中から出てきた思いを尊重した支援をするように心がけています。

今回のケースもBさんや母のストレングスに着目しながら、自らが持っている力が発揮できるようにお手伝いをしたまでです。

ジェノグラム・エコマップを書いてみよう

コラム２

ヤングケアラーの支援では、個々の世帯が抱える課題や背景が様々であることから、学校だけでなく多機関が連携して支援にあたる必要があります。ジェノグラムとエコマップを作成すると世帯をとりまく環境が可視化され、情報共有がしやすくなり、支援の方向性を検討する際にも活用できますし、支援が入る前後で、本人の環境がどのように変化したのかを客観的に確認することができます。

Bさんの事例においても、支援が入った後に家族に向かう矢印が増えたことがよくわかりますね。

ジェノグラム（家系図）は子ども本人を中心として家族や親族との関係性を図式化したものです。
一方、エコマップは対象者を取り巻く環境の相関関係を図式化したもので、学校や部活動、社会資源もこの中に含まれます。これらの図式によって、本人が家族や社会とどのような関係を持ちながら生活しているかが整理されます。（スクールソーシャルワーカー活動事例集（令和４年 12 月大阪府教育庁教育振興室高等学校課）から抜粋）

▼記号の説明

性別　□ 男性　○ 女性
中心人物　◨ 男性　◉ 女性
婚姻関係等　□ ― ○ 婚姻　□ // ○ 別居

▼対人関係を表す線の説明

親密　関係が強い　普通　関係が弱い　対立関係　エネルギーが向かう